

## 資料室だより 105

### Johann Sebastian Bach: Luther-Lieder; 30 Bach-Choräle für vierstimmigenChor

今年ルターの宗教改革 500 年記念にあたる年であることは皆さんもご存知のことと思います。上記の楽譜は時宜にかなったもので、バッハのコラールのなかでルター作のものを集めたアンソロジーです。ルターは音楽家として音楽辞典にも大作曲家並みのページを割かれて論じられます。彼の音楽的信仰告白 *Luthersmusikalisches Credo* をご存知でしょうか？ 神学だけが到達しうるものに音楽もまた到達しうる、と述べ神に至る道を音楽にも求めています。ルターのすぐれた業績は一つには宗教改革以前のカトリックの伝統的音楽を継承し、民衆化したことにあります。つまりアンプロジウス聖歌、グレゴリオ聖歌、またセドゥリウス、ウィポのような古代から中世初期までの聖歌を旋律はそのまま残してドイツ語で歌えるようにしたこと（おかげで日本のプロテスタント教会は 4 世紀のアンプロジウス聖歌を継承することができています）、また世俗の歌、よく知られた恋愛歌などの美しいものを宗教歌謡に作り変えた「コントラファクトウム」をしたこと、そして彼自身の作詞作曲をしたこと、以上の 3 つのあり方をもって簡素で美しい会衆賛歌 - コラールというものを作り上げました。しかし歌が一握りの聖歌隊から一般民衆の手に移ることによって文化のレベルを下げることなくかえって偉大なドイツバロックへの道を開きました。バッハが音楽の父といわれるならルターは祖父でしょう。バッハたちはルター派のコラールを源泉としてまことに輝かしい宗教作品を生みました。単純で簡素で真実な単旋律から複雑な芸術音楽が開花したのです。宗教改革は広く教養層の協力を求め、詩と音楽文化のうえに成り立っていたことがわかります。

ここに出版された楽譜集はテキストの原作者と出版年、バッハのカンタータなどの作品における引用、EG の番号などすべて注記されていますので非常に便利です。例えば有名な復活祭のコラール *Christ lag in Todesbanden* のところを見ますと EG<sup>1</sup> の 101、という讃美歌番号が記され、11 世紀の Wipo の *Victimae paschallaudes*（復活祭の続唱）が起源であること、その後それがドイツ民謡の *Christ ist erstanden* になっていったこと、バッハのカンタータ 4 番のコラールに用いられていることなどが楽譜の上に書かれた注記でわかります。つまりバッハとルターの関係がこの 1 冊の楽譜で一覧できます。合唱にもオルガンにも実用楽譜として使えるだけでなく一つのレファレンスツールともなっているわけです。

どうぞ手にとってごらんください。また、お手元に 1 冊置いておかれることもお勧めします。

杉本ゆり 記

---

<sup>1</sup> Evangelisches Gesangbuch (ルター派) 賛美歌集